



タイ王国



# チェンマイ大学

## Chiang Mai University

●学部学生 約27,000人 ●大学院生 約7,700人 ●教職員 約11,000人

ホームページ <http://www.cmu.ac.th/>

交流協定締結年月日：1990年4月24日 主管学部：農学部



チェンマイ大学正門



第3回チェンマイ大学・嘉義大学・香川大学  
合同シンポジウム 2024.8.26-30



看護学部学生10名表敬訪問

## 国際交流の特色

タイ北部のチェンマイ市（首都バンコクから北に飛行機で1時間）に位置する。1964年にタイ北部に最初に設立された高等教育機関として、教育、研究、地域貢献、国民文化・環境の保全に多大な実績を上げてきた。タイの大学ランキングで教育と研究の両面で最高レベルの評価を受けている。2019年に創立55周年を迎えた。市内3ヶ所と周辺1ヶ所を合わせたキャンパスは、1,400haと広大である。21学部、大学院、3カレッジ、1スクール、1研究所を有し、学部生約27,000人、大学院生約7,700人が在籍する。日本に留学したことのある教員も多い。キャンパス内に学生寮のビル群がある。留学生用の上級な寮もある。近年の国際化は目覚しく、ASEANのハブ大学としてメコン川流域圏のミャンマー、ラオス、カンボジア、ベトナム等の周辺国から積極的に学生を受入れている。人文学部には日本語学科に加えて日本研究センターもある。チェンマイは京都のように美しい古都であり、文教と観光の都市である。標高は約300mあり、バンコクに比べて気候は涼しく、日本人には暮らしやすい。2019年10月14日付の同大学のホームページには、我国の台風19号による被災者へのお見舞いが掲載された。

## 交流実績（令和4年度～令和6年度）

年度	教育学部			創造工学部			農学部			法学部		経済学部
	R4	R5	R6	R4	R5	R6	R4	R5	R6	R5	R6	R6
受入・派遣												
学生の受入	0	0	0	0	1	0	1	4	1	0	0	0
学生の派遣	10	0	11	0	0	4	0	0	30	2	1	7
研究者・職員の受入	0	0	0	0	5	0	0	9	1	0	0	0
研究者・職員の派遣	4	0	12	1	0	3	1	0	7	0	0	1
オンライン交流参加者（本学）	56	37	33	0	5	0	16	0	0	0	0	0
オンライン交流参加者（相手機関）	2	7	24	0	2	0	12	0	0	0	0	0

年度	医学部医学科			医学部看護科			その他		
	R4	R5	R6	R4	R5	R6	R4	R5	R6
受入・派遣									
学生の受入	0	7	4	0	5	5	3	4	1
学生の派遣	0	0	2	0	6	8	0	0	0
研究者・職員の受入	0	10	0	0	1	1	0	16	0
研究者・職員の派遣	2	2	8	2	1	7	0	0	10
オンライン交流参加者（本学）	33	3	0	1	0	0	12	3	0
オンライン交流参加者（相手機関）	24	1	0	1	0	0	40	1	0

## 教員・学生からの声

教育学部では、CMUに短期留学の学生たちを毎年10名程度派遣しています。そこで、学生たちは、CMUの学生たちと国際交流をします。また、タイの料理作りや象乗り体験などのアクティビティに挑戦します。さらに、タイの田舎のホームステイを体験し、その地元の小・中学校で、書道やカルタなどの日本文化を紹介・交流します。異文化をまるごと体験し、学び合い、交流できる素晴らしいプログラムです。

教育学部特命教授 佐藤 明宏

2025年の2月から3月にかけて、チェンマイ大学短期留学プログラムに参加しました。初めての海外で不安もありましたが、チェンマイ大学のバディが優しく気さくに接してくれ、とても楽しく過ごせました。ドイ・インタノンの村でのホームステイでは、普段とは大きく異なる生活に不便に感じることもありましたが、学校での子どもたちとの触れ合いや、村の人たちの温かい歓迎を通じてとても素晴らしい経験ができました。このプログラムを通して、自分から積極的に学び、関わろうとする意識が強くなったと感じています。普段とは違う環境だからこそ、今までの自分とは違う新しい自分を発見でき、本当に参加してよかったと思います。

教育学部2年生 佐長 直心

2025年3月10日から3週間、Chiang Mai大学医学部での臨床実習に参加し、現地の医学生とほとんど同じスケジュールをこなしてきました。最初の2週間は外傷外科、最後の1週間は麻酔科をローテートしました。現地の交通事情を見たら納得すると思いますが、外傷外科で診る患者さんのほとんどがバイク事故で負傷した方々でした。像に噛まれた、といった日本では見かけることのない症例もあり、度肝を抜かされました。麻酔科ではそれまでまだ一度もやったことのない気管挿管をさせていただくなど、実践形式で非常に良かったです。先生方や学生たちは英語を流暢に話せるので、コミュニケーションには何不自由することなく、逆に自分がもっと話せるようにならなければと思われました。3週間生活してみても、治安は良く、タイ料理はreasonableで美味しく、非常に住みやすいと感じました。最初は留学するかどうか思索していましたが、留学して本当に良かったです。後悔したことは何一つありません。個人的にもタイを好きになり、また何かしらの機会に行ってみたいと思います。

令和6年度医学科5年 徳島優樹

2024年8月、私は自身にとって2度目となるチェンマイ大学との交換留学に参加しました。10日間に渡る本プログラムには、香川大学を含む日本の3大学と、台湾の1大学が参加し、同じ志を持つ多くの学生と交流することが出来ました。今回は、タイの看護教育や保険制度に加えて、私立病院のICUや救急外来の見学など、昨年は経験できなかった新たな学びを数多く得ることが出来ました。特に、卒後わずか3か月の看護師さんがICUで即戦力として活躍されている姿を間近で見たことは、私の理想の看護師像に大きな影響を与えただけでなく、看護を学ぶ意欲を一層高めるきっかけとなりました。

また、現地の学生と将来の目標や看護への思いを語り合い、実習や試験の大変さを共有し合うなかで、国や言語を越えた深い絆が生まれました。そして、「世界には、自分と同じように悩みながらも努力を重ねている仲間がいる」と実感できたこの経験は、私に大きな励みを与え、「自分も負けていられない」と奮い立たせる機会にもなりました。日々の学生生活では、壁にぶつかることも多くありますが、彼らと過ごした時間や言葉が、今でも私の原動力となり、力強く背中を押してくれています。こうしたかけがえのない学びと出会いを実現してくださった多くの仲間や先生方、先輩方、全ての関係者の皆様への感謝を忘れず、今後も看護と真摯に向き合い、成長を続けていきたいです。

令和6年度看護学科3年 徳田萌花

私たちは今年、2021年12月にチェンマイ大学を含む5つの大学でさくらサイエンスプログラムの支援によりzoom上での国際交流を行いました。このプログラムでは、それぞれの大学が特色・地元紹介するとともに、将来の交通に関する政策の方向性について議論を行いました。海外の学生たちと、それぞれの都市が抱える問題について議論することができ、日本と違った都市・交通問題や解決策への様々な視点を知ることができたと思います。オンライン上でしたが、このような形で国際交流ができたことに、非常に嬉しく思いました。新型コロナウイルス問題が終息したら、ぜひ海外の都市の現状を見ることに加えて、学生とも交流し、コミュニケーション能力についても身に付けたいです。

創造工学部4年生 中地遥菜

本学とチェンマイ大学(CMU)との学術交流協定の締結後に、二度のJICAプロジェクト(1993-98, 2003-06)で、多くの教員・研究者が往来して植物バイオテクノロジーや省農薬技術の指導・研修が行われ、これが希少糖、生物資源利用、農業経済、植物病理・栄養、昆虫等の多様な共同研究に進展しています。CMUの農・農産・理の3学部から多数の優秀な留学生を受入れ、特に2002年からのAAP特別コースによってその数が増えました。両大学間の広範で多数の交流実績に基づき、本学はCMUを海外国際交流拠点校と定め、そのプラットフォームとして2007に第一回合同シンポジウムをCMUにて開催し、農・工・医学部等の教職員・学生45人が参加しました。その後、交流は文系3学部等にも拡大し、2回目を2008年に本学にて(CMUの43名を招聘)実施し、以降隔年で交互に開催しています。2009年からの農学研究科のアジア人財資金構想事業以降、食の安全を学ぶ留学生を輩出し、JASSO支援のSSやSVプログラムの実績も挙げました。2012年から修士課程(CMUは農学と農産学の2研究科)のダブルディグリープログラムが始まり、CMUからは、ほぼ毎年1名程度名受け入れており、本学からは昆虫生態学で2名を派遣しました。また、CMU農産学部の実施する国際シンポジウムInternational Conference of Food and Applied Bioscienceが2年おきに開催されており、毎回1〜3名の本学教員・学生が招待を受け、研究交流を行っています。

農学部教授 川村 理

インターナショナルオフィスは、チェンマイ大学(CMU)と学生の派遣・受け入れの両方を行っています。学部生の派遣は、「Explore」という交換留学プログラムを通して実施しています。受け入れに関しては、日本語および英語による授業やフィールドワークを含む「Sanuki Program」を運営しており、特別聴講学生を受け入れています。加えて、CMUの日本語学科から、国費留学生である「日本語・日本文化研修留学生」も多数受け入れてきました。また、CMU・国立嘉義大学(台湾)・本学の3大学による合同シンポジウム(上掲写真)では運営を担当し、学生・教員の積極的な参加を促進しています。

インターナショナルオフィス准教授 高水 徹